

# 和泉式部集における勅字歌群の研究

A Study of the Rokuji Songs in the Izumi Shikibu-shu

矢吹 郁

Fumi Yabuki

大妻女子大学大学院 人間文化研究科 言語文化学専攻 修士課程

キーワード：和泉式部集，勅字歌群，平安中期和歌

Key words：Izumi Shikibu-shu, Rokuji Songs, Mid-Heian period waka

## 1. 研究目的

平安時代中期の女性歌人として著名な和泉式部は、『小倉百人一首』にも撰ばれた「あらざらん」歌をはじめ、心情を率直に詠む「正述心緒」の歌で広く知られているが、その一方、景物などの題材に託して心情を詠む「寄物陳思」型の歌も数多く残している。その巧みで斬新な歌風は『後拾遺集』において高く評価されているほか、相模ら後続の歌人たちにも多大な影響を与えており、和歌史上における和泉式部の功績はきわめて大きいものがある。

勅字歌群では、和歌の一番上の文字（冠音）を固定（音韻規制）し、歌を詠じてゆく、といった手法が用いられている。加えて、歌々の内容は、冠音の基になった規制の句に即したものになっている。この規制の句は、歌群ごとに和歌・経文・漢詩となっているが、これらは和泉式部が自身で選択したものと考えられている。

修士論文においては、和泉式部の勅字歌群である「いはほ」歌群、「不愛」歌群、「観身」歌群に詠まれた歌々を、主に表現に着目して論じ、各歌群の特徴を捉えること、また、平安中期の和歌表現における『和泉式部集』『和泉式部続集』の勅字歌群の意義を明らかにすることを目的とした。

## 2. 研究実施内容

まず、和泉式部の勅字歌群の先行例として挙げられる曾禰好忠の群作歌について論じることで、音韻規制を用いた歌の創作活動の変遷を辿った。

「いはほ」歌群・「不愛」歌群においては、それ

ぞれ一首一首の歌の読解から始め、表現方法に着目して論を進めた。

また、和泉式部詠に同じ表現が見られた場合は、歌を列挙した上で、歌々の共通点、相違点を探った。異なる歌人、または中古以前、以降に同じ表現が見られた場合も、同じように歌の列挙を行った。

「観身」歌群においては、歌の数が「いはほ」歌群、「不愛」歌群と比較して膨大だったため、歌群全体の特徴を捉えることに重点を置いた。

それぞれの歌群についてまとめ、全体を通して和泉式部の勅字歌群の特徴についてどのようなことを指摘することが可能であるか、考察を行った。

修士論文では、和泉式部の勅字歌群である「いはほ」歌群、「不愛」歌群・「観身」歌群について、それぞれ表現に着目し、各歌群の特徴を捉えること、また、平安中期の和歌表現における勅字歌群の意義を明らかにすることを目標とした。

和泉式部は、各歌群において「規制の句に即した」歌を制作し、また、工夫を凝らしつつ、「作品」として鑑賞されることを想定したかのような詠みぶりを見せていた。ただ個人の思いを吐露するのではなく、あえて冠音を規制し、歌人としての技量も示しつつ、勅字歌群を「鑑賞される作品」として世に送り出したのではないだろうか、と考察した。

ただ漫然と歌を詠むのではなく、「音韻規制」と「規制の句に即した」歌を詠む、という制限を設け、三つの群作歌を残した和泉式部の功績は、中世の慈円の「勅句」からも分かるように、大きなものだったと言えるであろうと結論付けた。

### 3. まとめと今後の課題

中古から時代が下ると、中世の歌人である慈円の「賦百字百首」「勅句百首」という歌群が見られた。

これは、和泉式部の勅字歌群と比較してゆくと、冠音規制ではなく、句を固定して歌を詠んでゆくものであり、また、「速詠」であること、句は初句から第五句までと固定する句の位置も様々であったこと、四季折々の景物が詠まれたことなど、いくつもの相違点が見られた。

このように、中世での句を固定する「勅句」では、和泉式部の勅字歌群では見られなかった「速詠」であることが重視されたほか、「景物」を勅句に織り込み、詠んでいたことが傾向として見られた。また、和泉式部の勅字歌群の特徴の一つであった「規制の句に即した詠みぶり」も、自身の歌の技量を誇る「規制」の一つとして用いられたようであった。

曾禰好忠から始まった一連の群作は、和泉式部へと引き継がれ、三つの勅字歌群として世に出された。時代が下り、中世になると、慈円らが句を固定する「勅句」を新たに生み出してゆく。一連の音韻規制は、制約の形を変えつつも、新たな和歌の詠み方として受け入れられていたようである、ということが結論として得られた。

課題としては、歌の用例の内容や解釈について深く考察することができなかつた点や、当初予定していた「観身」歌群の一首一首の読解を行うことができなかった点が挙げられる。これらの問題を解決することで、新たな共通点の発見や、曾禰好忠の群作歌から和泉式部の勅字歌群、慈円の「賦百字百首」「勅句百首」への変遷だけではなく、和

歌そのものの表現史を視野に入れた論を展開することができたのではないかと考える。

また、先行研究が少ないことも原因の一つであるが、一連の論が先行研究に大きく依存する形で論じられていることも問題点の一つである。

和泉式部の勅字歌群だけではなく、何らかの規制を設けて歌を詠んでゆく行為そのものに目を向け、様々な先行研究を読むべきであったと考える。

### 4. 主要参考文献

- (一) 久保木寿子「和泉式部の群作歌」(『和泉式部の方法試論』(新典社、二〇二〇年。書き下ろし。)
- (二) 佐伯梅友・村上治・小松登美『和泉式部全釈 正集編』(笠間書院、二〇一二年。)
- (三) 石川一『慈円和歌論考』(〈笠間叢書 308〉(笠間書院、一九九八年。)
- (四) 久保田淳・馬場あき子 編『歌ことば歌枕大辞典』(角川書店、一九九九年。)
- (五) 中村幸彦 編『角川古語大辞典』(角川書店、一九八七年。)

※『和泉式部集』『和泉式部続集』の引用は、清水文雄 校注『和泉式部集・和泉式部続集』(岩波文庫)(岩波書店、一九八三年。)による。ただし、歌番号は新編国歌大観による。

### 付記

本研究は、大妻女子大学人間生活文化研究所の研究助成(DB2343)「和泉式部集における勅字歌群の研究」を受けたものです。